

のつばとでふと目だま



ラング世界童話全集

のっぽとでぶと目だま

きいろの童話集



川 端 康 成 訳
野 上 彰



川 端 康 成

のっぽとでぶと目だま 川端康成，野上彰 訳

ポプラ社 昭和39（1964）

262p 23cm（ラング世界童話全集 5）

〔分類〕 933

ラング世界
童話全集⑤

訳者との話し合い
により検印を廃止



のっぽとでぶと目だま

昭和39年8月25日再版©

定価 350円

訳者 川 端 康 成
の 野 上 彰

発行者 久保田 忠夫

印刷所 株式会社須藤印刷

発行所 株式会社 ポプラ社

東京都新宿区須賀町5
振替東京149271番

（石毛製本）

は し が き

アンドルー・ラングの集めたこの童話のなかには、世界じゅうのすべてと
いっても、よいほどの、子どもたちの夢があります。すなおな男の子もいれ
ば、らんぼうな男の子もいます。やさしい女の子もいれば、いさましい女の
子もいます。子どもたちのかわりに、動物たちが主人公になっている童話もあり
ます。だが、その主
人公たちみんなは、いつも、明るくて、健康で、正しい世界をきずきだすために力をつくすのです。
「ラングの童話全集は、世界の子どもたちへの精神の糧である。」と、有名な作家のバーナード・ショ
ウが、書いていますが、その意味は、あなたたちの心を養うために、なくてはならないものだとい
うことでしょう。

百年ものあいだ、世界の人たちが、子どもどきに読んで、心を養った童話全集を、私たちは祈
りをこめて、あなたたちへおくりたいと思います。



野 川
上 端
彰 康
成



目次

のつぽとでぶと目だま	六
王子と三つの運命	四
いいことをおぼえてきた	四
へびの王子	五
ヒヤシンス王子	六
巨人のむすめ	六
お日さまの子	九
妖精のしくじり	一〇





みどり色のさる 一三五

六わの白鳥 一四六

アイゼンコップ (ハンガリー) 一五七

竜とおばあさん 一七四

はしばみの実の子ども (ハンガリー) 一八

浦島太郎とかめ (日本) 一八七

ベンサダーチュウの物語 (シチリア) 一九七

ニールスの大男たち 二四

ズールビジアの物語 (アルメニア) 三三

解説 (三六)



さし 絵	装 てい
新 ^{あら}	吉 ^{よし}
井 ^い	崎 ^{さき}
五 ^ご	正 ^{まさ}
郎 ^{ろう}	巳 ^み



■ ラング世界童話全集 ■

のっぽとでぶと目だま

きいろの童話集



川端康成・野上彰訳

のつぽとでぶと目だま



むかしむかし、ひとりの王さまがありました。ひとりむすこを、それはそれはかわいがっていました。ところである日のこと、王さまはむすこをよびにやっていたいました。

「髪が灰色になってきて、年をとってしまつて、もうすぐお日さまのぬくもりもわからなくなり、木や花を見ても、ころをうごかされることなくなるだろう。だから生きているうちに、おまえがいいおよめさんをもらうのを見たい。そんなわけだから、できるだけはやく結婚をしてくれないか。」

「おとうさん。いままであなたのおいづけには、ことばをかえたことはないのですが、わたしはおよめさんになってくれそうなむすめを、ひとりも知らないのです。」

それをきくと年をとった王さまは、ポケットから金のかぎをだして、むすこにわたしていいました。「塔のいちばん上まで、まっすぐ階段をのぼっていきなさい。そこで、まわりをよく気をつけて見

て、見たなかでどのむすめがいちばん氣にいったか、おりてきてわたしにおしえなさい。』

それで、若者はのぼっていききました。それまで一ども塔のなかにはいったことはなく、なにがあるのかわからないのでした。

階段はうねうね、うねうねまがつていて、王子はめまいがするくらいでした。ときどき、階段の横にひらいている大きなへやが見えましたが、いわれたように、いちばん上までのぼっていったのです。すると広間があつて、広間のつきあたりに鉄の戸がありました。その戸を、もってきた金のかぎであけ、なかへはいっていききました。そこはがらんとしたへやで、金の星をちりばめた青い屋根と、芝生のようにやわらかな、みどり色の絹をしきつめてありました。金でふちをとった十二のまどから、ひかりの光がさしこんでいて、どのまどにも、わかいむすめのすがたがえがかれていました。見ていくと、つぎつぎにまえのむすめよりもうつくしいのでした。王子は、どのむすめがいちばん氣にいったかたしかめようとせず、びっくりしてながめていると、むすめたちは目をあげて、ほほえみかけました。口をききはしまいかとまっていたましたが、声はきこえませんでした。

ふと、一つのまどが、白い絹のカーテンでおおわれているのに氣がつかしました。

カーテンをあげると、銀の帯をしめ、真珠のかんむりをかぶり、白いきものを着た、太陽のようにつくしく、墓場のようにななしそうな、むすめのすがたがありました。王子は、まるで石になつてしまったようにたちどまつて、むすめをながめました。ながめていると、むすめの顔にただよって



るかなしみが、王子のこころのなかにしみこむように思えて、王子はさけびました。

「この人こそ、わたしのおくさんになる人だ。この人だけだ」

そういうと、そのわかいむすめは、ほおをそめて、うなだれました。ほかのむすめたちのすがたはきえてしまいました。

わかい王子は、いそいでおとうさんのところへもどっていった、見てきたことを、なにもかもうちあけ、どのむすめをおくさんにえらんだか話しました。年をとった王さまは、王子の話をきいてはげしくかなしみました。それから王子にいいました。

「かくしてあったものをさがしたりして、なんとという運のわるいことをしたんだ。おそろしくあぶないめにあおうとしているのだよ。あの

わかいむすめは、鉄の城に住んでいるところのねじけた魔法つかいの力で、とじこめられているのだ。たくさんの若者たちがたすけようとしたが、だれひとりかえってこない。だが、すんだことはすんだことだ。いいだしたことばはまもらなければならぬ。おまえはやくそくをしたんだ。やぶることはできない。いつて、おまえの運命にぶつかれ。そして、わたしのところに、ぶじに、元気でかえってきてくれ。

それで、王子はおとうさんをしっかりとだいてわかれをつげ、馬ののつて花よめをさがしに出かけました。うきうきと五十六時間馬ののつていくと、一どもきたことのない森のなかにまよいこんで、うねりくねった道や、ふかい谷で、まいごになってしまいました。どこにいいのか知ろうとしました。が、だめでした。森はふかく、日の光をさえぎっているのです。どちらが北か南かわからず、どの方向へむかっていけばいいのか、知ることできないのでした。がっかりして、このおそろしい場所からのがれるのぞみを、すっかりなくしてしまおうとしたとき、一つの声が王子によびかけるのをききました。

「おうい、おうい、ちょっとまで。」

王子がふりかえってみると、おそろしく背の高い男が、足のつづくかぎりにはやく走りながら、うしろにきていました。その男は息をきらせながらいいました。

「まっってください。あなたのめしつかいにしてください。そうしても、きっと後悔はしないでしょ。」

「おまえはだれだ。なにができる。」

「わたしの名まえはのっぽです。その気になれば、からだをのぼすことができますのです。あの松の木
のてっぺんに、鳥の巣がみえるでしょう。わたしは、木にのぼったり、そんなやっかいなことをし
ないで、あなたのために巣がとれますよ。」

のっぽはぐんぐん、ぐんぐん、からだをのぼして、すぐに、松の木とおなじくらい背が高くなりま
した。ポケットのなかに巣をいれると、まばたきもしないうちに、またもとのすがたになり、王子の
まえに立っていました。

「なるほど、おまえのしごととはよくわかった。だが、鳥の巣なんかわたしはいらぬ。もう子どもじ
やないからね。ところで、この森からわたしをだしてさえくれたら、たしかにおまえは役にたつと
いえるんだがな。」

「ああ、そんなことはわけのないことですよ。」

のっぽは、そうこたえたと、ぐんぐん、ぐんぐん、からだをのぼしていつて、森のなかのいちばん
高い木の三ばいにもなりました。それから、あたりを見まわしていいました。

「森を出るには、あっちのほうへいかなければなりません。」

またもとのすがたになると、王子の馬のたづなをとってあんないしていきました。まもなく森のそ
とに出ました。すると、まえのほうのひろい野原のはしにうず高い岩があつて、あちこち木がはえ、

まるで町のとりでのようでした。

森をあとにすると、のっほは王子にいました。

「だんなさま、なかがやってきますよ。あの男も、めしつかいになさい。そうしたら、いい手だすけになりますよ。」

「そうか、その男をよんでこい。そうしたら、どんな男かわかるだろう。」

「まだだいぶはなれたところにいるので、よべないのです。わたしの声がやるときこえるくらいでしょう。ずいぶんとくさんもってあるいてるので、ここにくるにはすこしひまがかかります。自分で出かけていって、ここへつれてきましょう。」

こんどは、頭が雲のなかにかくれてしまうくらい背をのばしました。二あし、三あし、大またであるくと、その男をせなかにのせ、王子のまえに



おろしました。あたらしくやってきたのは、おそろしくふとった男おとこでした。まるでたるのようです。

「おまえはだれだ。なにができる。」

「だんなさま、でぶ、というのがわたしの名なまえです。しようと思おもえばいくらでもでぶになれるのです。」

「どんなふうにやれるのか、やってみよう。」

「それならだんなさま、できるだけそいで走はしって、森もりのなかへかくれてください。」

と、でぶは大きな声こえをだし、からだをふくらませはじめました。

王子おうじはなぜ森もりのなかへ走りこまなければならないのか、わけがわからなかったのですが、のっぽが森もりへ走はしっていくのを見たので、そのお手本てほんにしたがったほうがいいと思おもいました。そうしたので、やっとたすかったのです。いきなり、でぶがからだをふくらませたので、王子おうじも馬うまも、たたきつぶされるところでした。でぶは、まわりのなんエーカー（イギリスの面積の単位。約三・五九平方キロメートル）もの地面じめんにひろがりました。まるで、山やまのようでした。そのうち、でぶはふくれるのをやめ、ふかい息いきをはいたので、森もりぜんたいがふるえました。それから、もとの大きさにちぢまりました。

「おまえのおかげでにげださなくてはならなかった。おまえみたいな男おとこにまい日出にちであつては、たまつたものじゃない。わたしのめしつかいにしてあげよう。」

こうやって、三人さんにんのなかまが旅たびをつづけていき、ある岩いわのそばに近ちかよつてくると、目めをほうたいした男おとこにいました。のっぽがいました。

「だんなさま、この男おとこがわたしたちの三人さんにんめのなかまです。あなたのめしつかいにぜひなさい。きつとお役やくにたつのがわかるでしょう」

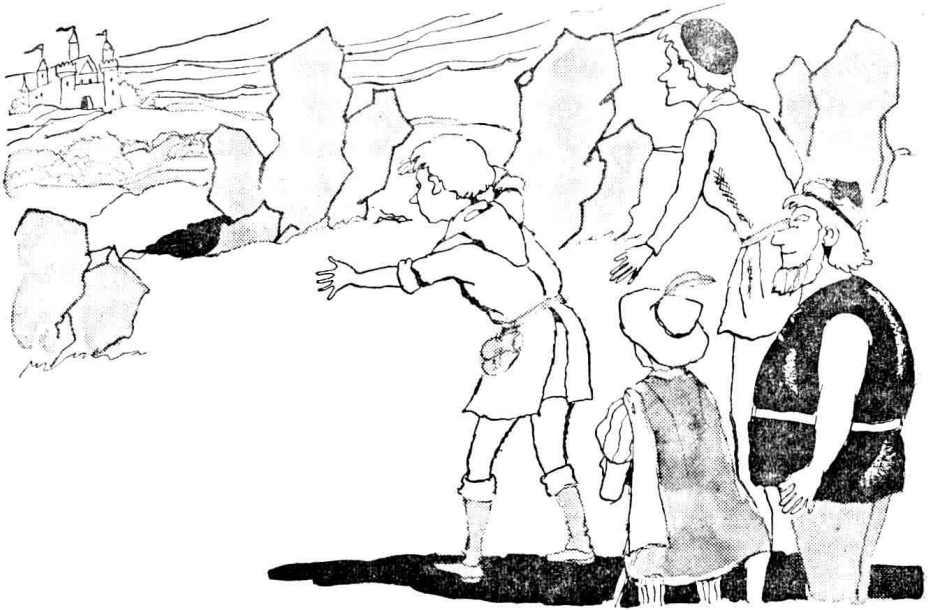
「おまえはだれだ。なぜ目めをほうたいしているのだ。それじゃ、道みちがまるつきりわからないだろう。」

「だんなさま。それは、まるであべこべです。あんまりよく見えすぎるので、どうしても、目めにほうたいしておかなければならないのです。こうやっていたって、ほうたいをしない人ひととおなじように、よく見えるのです。ほうたいをとると、わたしの目めの力ちからが、なにもかもつきさしてしまふのです。じつとながめると、なんにでも火ひがついてしまふし、火ひがつかなければ、こなごなになってしまふのです。それで、みんなはわたしのことを、目めだ、ま、とよんでいます」

そういうながら、ほうたいをとると岩いわにむきました。目めを岩いわにすえるとくずれる音おとがして、まもなく、岩いわは砂すなのかたまりになってしまいました。砂すなのなかをしらべると、なにか、あかるく、きらきらかがやいていました。目めだまはそれをひろいあげると、王子おうじのところへもってきました。それは一かたまりの純金じゆんきんだとわかりました。

「おまえはふしぎな男おとこだ。おまえをめしつかいにしないようなら、わたしはばかものにちがいない。ところで、おまえの目めがそんなによく見えるのなら、鉄てつの城しろがここからどのくらいのところにあるのか、いま、なにがはじまっているのかおしえておくれ」

「ひとりでお出でかけになっていたら、つくまでに一年ねんはたっぷりかかるでしょう。わたしたちがいっ



しよですから、今夜つくことができますよ。いまは、夕ごはんのしたくをしています」

「城に王女がいるのが見えるか」

「魔法つかいは鉄ぼうをはめこんだ、高い塔のなかにとじこめていますよ」

「ああ、わたしに手つだって、王女をたすけてくれないか」

三人は、そうするとやくそくをしました。

目だまが目でこわしてあけてくれた、灰色の岩を通って、みんなは出発しました。そして大きな山をこえ、ふかい森をぬけました。じやまなもので出あうたびに、三人のなかまは力をあわせ、ともかくかたづけていきました。日がしずみかけたころ、鉄の城の塔が、王子にも見えてきました。太陽が地平線にしまないうちに、門にかかっている鉄の橋をわたりました。やっとまにあつたの